

# 児童のエージェンシー発揮を支援する特別活動 —AAR サイクルの獲得を目指す学級活動を通して—

後藤 律子

千葉大学教育学部委託研究生

本研究は、児童が学級の話合い活動を生かし、目標に向けた活動を通じて、見通し、行動、振り返りの AAR サイクルを習得し、エージェンシーが発揮できるような授業を開発し、その成果と課題を明らかにすることを目的とした。第一に、AAR サイクルを軸とした話合い活動の実践計画を作成した。第二に、異年齢交流活動を設定し、児童が AAR サイクルを習得できるようにした。第三に、アンケート調査を実施し効果測定を行った。結果として児童は、特別活動を行う中で、見通しや振り返りを通して、改善に向けて行動する意識が高まった。しかし、児童全員が AAR サイクルを活用できたとは言えない。今後は、児童が自ら課題を設定し AAR サイクルを往還できるような授業開発をしていくことが課題となる<sup>1)</sup>。

キーワード：エージェンシー、AAR サイクル、ラーニング・コンパス、学級活動、異年齢交流活動

## 1. 問題の所在

### 1.1. 社会問題とエージェンシーの関係について

近年、若者の社会参画に対する意識の低下が社会問題となっている。日本財団 (2022) 「18 歳意識調査」を見ると、日本の「自分が責任のある社会の一員だと思う」という項目が、6 か国中 (日本・アメリカ・イギリス・中国・韓国・インド) 最下位であることが分かる。日本の若者の、国や社会に対する意識が低いことが示唆される<sup>2)</sup>。また、この社会参画について、教育基本法の条文で次のような記述がある。

第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

第二条 三 (中略) 公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

また、文部科学省が作成し、仮訳を行った「OECD Education 2030 プロジェクトについて」(2018) の「OECD Learning Framework 2030 (2030 年に向けた学習枠組み)」には「エージェンシーは、社会参画を

Ritsuko GOTO: Special Activities to Support Children's Demonstration of Agency: Through Classroom Activities Aimed at Acquiring the AAR Cycle.  
A Research Student Committed by Faculty of Education, Chiba University.

通じて人々や物事、環境がより良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する<sup>3)</sup>とある。そこで本研究では、「OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤)」において中核的な概念としてエージェンシーを提起していることに着目した。エージェンシーは「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義されている。この能力は、「生徒が自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与える能力と意志をもっている」という原則に基づいている<sup>4)</sup>。さらに、「OECD Learning Framework 2030 (2030 年に向けた学習枠組み)」の注釈には、「これら (教育基本法) は、エージェンシー (Agency) の考え方に合致するものである」と記述されている<sup>5)</sup>。つまり、日本の教育基本法に示されている主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度がエージェンシーに合致すると読み取ることができる。

そして、このエージェンシーを発揮することで確立する手段として AAR サイクルがある。AAR サイクルとは、「予測 (Anticipation)、行動 (Action)、振り返り (Reflection)」の頭文字をとったものである。OECD (2019) は AAR サイクルについて次のように述べている。

AAR サイクルは、学習者が継続的に思考を改善し、ウェルビーイングのために意図的かつ責任をもって行動する反復プロセスである

つまり、ラーニング・コンパスにおける AAR サイク

ルは児童生徒が主体となり反復しながら学習を行うプロセスだと考えられる。また、小牧 (2023) はエージェンシーについて次のように述べている<sup>6</sup>。

OECD は「エージェンシー」は子どもに備わっているという立場をとっており、厳しい状況でなければどのような場面においても発揮されるものであり、後天的な学習によって初めて身に付けられる能力としていないことが読み取れる。また、このような立場に立つとき、自分で目標を設定したり、振り返ったり、責任をもって行動したりする能力は、教師が意図して学習の中に組み込まなければ発揮されないのではなく、子どもが行為を起こそうとするときには必然的に生じるものと捉えることができる。

小牧が述べるように、「エージェンシー」は「子どもが行為を起こそうとするときには必然的に生じるもの」であり、現行の学習指導要領にある「主体性」に近い概念ではあるが、「自分で目標をもって行動したり、振り返ったり、責任をもって行動したりする」というところを重要視し、本稿ではより広い概念として捉えたい。

次に「共同エージェンシー」について見ていく。「共同エージェンシー」について、OECD (2020) は次のように述べている<sup>7</sup>。

共同エージェンシーとは保護者や仲間、教師、そして広い範囲のコミュニティは生徒が持つエージェンシーの感覚に影響を与え、また生徒も保護者や仲間、教師が持つエージェンシーの感覚に影響を与え、子どもの成長やウェルビーイングにより影響を与える好循環をつくります (中略)「協働的なエージェンシー (Collaborative Agency)」としてしばしば言及される「共同エージェンシー (Co-Agency)」は、人を取り巻く環境がその人の持つエージェンシーの感覚に与える影響を含んでいます。

これは、後述する特別活動の目標に近いものがある。

## 1.2. 特別活動におけるエージェンシー

学校教育におけるエージェンシーの発揮について、松尾ら (2020) は、「集団や社会を強く意識している特別活動は (中略) 重要な役割を果たすことが期待される。」とし、特別活動とエージェンシーとの関わりについて論じている<sup>8</sup>。また、元ら (2021) は、「(社会への責任に対するエージェンシーは) 『集団』のウェルビーイングを目指し、人々と関わりながら『社会』に参画し、コミ

ュニティや学校の中で大人の支援を受けながら」エージェンシーを育成する場として『特別活動』の学級活動に含まれる具体的な活動としての学級会での実践がある。(中略) 児童生徒が発言するだけでなく、他の児童生徒の意見を受け止め、問題解決へつなげることがエージェンシーである。」と述べている<sup>9</sup>。なお、小学校学習指導要領では、特別活動の目標を次のように示している<sup>10</sup>。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

「集団や社会の形成者」としての見方・考え方を働かせること「自主的・実践的に取り組むこと」「集団や自己の生活上に課題を解決すること」等、エージェンシーとの関係が深いことが分かる。

## 1.3. 特別活動の学習過程と AAR サイクルのプロセス

小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) では、学級活動の過程を次のように表している。「①問題の発見・確認 ②解決方法等の話し合い ③解決方法の決定 ④決めたことの実践 ⑤振り返り」<sup>11</sup>この学習過程を得て、子供たちは自らの能力を生かした学びを創出し、自己形成していくことになる。また林ら (2020) は、PDCA サイクルと AAR サイクルの違いを以下のように述べている<sup>12</sup>。

学習の過程は日本では PDCA が使われることが多いが OECD は AAR サイクルで考えられている。これは日本でも従来から活用されてきた導入・展開・まとめといった指導モデルと重なるものである。違いは、授業導入時に児童に意図的に授業の見通しを持たせようとしているかどうか、授業のまとめの時に意図的に授業内容を振り返らせているかどうかといった点にある。共通点としては、授業を 3 段階で構成し、前時からのつながり、次時へのつながりといった連続性を意識していることである。

つまり、従来の学習過程と異なり、児童に見通しをもたせることで児童のエージェンシーが期待されるのだと言える。また、意図的に振り返りを行わせることで、AAR サイクルを学習者が継続的に回せる手段になるのだと言える。

また白井 (2020) は、「教師が行う授業上の工夫ではなく、生徒に求められるコンピテンシーを育てていく

のに必要なプロセスとして AAR サイクルが重要である」と示している。ラーニング・コンパスにおける AAR サイクルの意義として、「(中略) 生徒が教師の指示に従って受動的に学習をするだけでなく、AAR サイクルを回して、自ら『見通し』をもち『行動』をしていけば必然的に、検討しようとしている課題やテーマを自分事として捉えることができる」<sup>13</sup>としている。つまり、AAR サイクルを児童生徒が獲得することで当事者意識が生まれ、エージェンシーを発揮すると言える。そこで本研究では、特別活動の学習過程を、AAR サイクル学習プロセスを取り入れながら行えないかと考えた。

#### 1.4. 異年齢交流活動

AAR サイクルを児童が獲得することで当事者意識が生まれ、エージェンシーを発揮するための学習活動とはどのようなものだろうか。そこで、異年齢交流活動を通して、児童のエージェンシーが発揮される可能性があるかを検証した。

文部科学省(2011)によると、異年齢交流活動とは「上級生(6年生若しくは5年生)と下級生(1年生若しくは2年生)による『異年齢の交流活動』です。(中略)『交流活動』の中身としては、どんな子供でも『楽しめる』ようなゲーム等を実施するという前提で考えられます」とされている。また、『異年齢の交流活動』によって地域や家庭での子どもたちの社会性の育ちを再現する際には、子供のどのような面を育ててきたのかを、理解することが参考になります」とある。さらに、『異年齢交流の活動』を通して育まれる『人と関わる喜び』は、教師が『与える』ものではなく、児童『自らが獲得していく』ものです<sup>14</sup>とある。これは、児童が「自ら獲得していく」という文脈で捉えるとエージェンシーと近いものだと考えられる。よって、「異年齢の交流活動」を実施することで、子供たちの社会性を育てることが期待される。具体的には、異年齢の子供たちが交流を通して、AAR サイクルを獲得しエージェンシーが発揮することで、子供たちがコミュニケーション能力や協調性を身に付けることになる。

しかしながら、従来の異年齢活動の中には問題点も見られた。前掲によると「従来の異年齢活動の中には、6年生に『仕事』をさせるだけの活動、低学年にレベルを合わせて6年生が物足りない活動、6年生の担任に全ての準備がかかってくる活動、等」の課題を挙げている。

「異年齢交流活動」は教師主導ではなく児童主体で行う活動であり、この活動を通して児童のエージェンシーを発揮させることが大切だと言える。

#### 1.5. 本研究で考える AAR サイクル

AAR サイクルの Anticipation の意味は「見通し」の

他に、「予測」や「期待」という意味をもつ。具体的には、将来の出来事や状況に対する興奮や期待感を指す。何かが起こることを楽しみにしている状態や、将来の出来事を予測して心待ちにしている感情が含まれる。よって、児童自身がどのような結果を期待しているのか、どのような未来を予期しているのかを明確にするステップと捉える。また、白井(2020)はAARについて次のように述べている。

「行動」(Action)のステージで重要なのは、「行動」が本来の目的に沿って行われることと、責任を伴う形で行われることである。そこでの「行動」が本来目指したような形で行われたのかどうかについて、「振り返り」を行うことも重要である。すなわち、「行動」の前後における「見通し」と「振り返り」が重要になってくる。

メタ認知や自己意識、批判的思考力などは、「振り返り」を通して育成していくし、これらは、効果的な「見通し」を行っていくためにも必要である。それゆえ、「振り返り」と「見通し」がそれぞれお互いを高め合う効果をもつのである。

以上のことから、本研究で考える AAR サイクルは、図1で表したように、「見通し」「行動」「振り返り」を往還することで、児童が高め合い、学びに効果的にはたらくものとして捉えた。

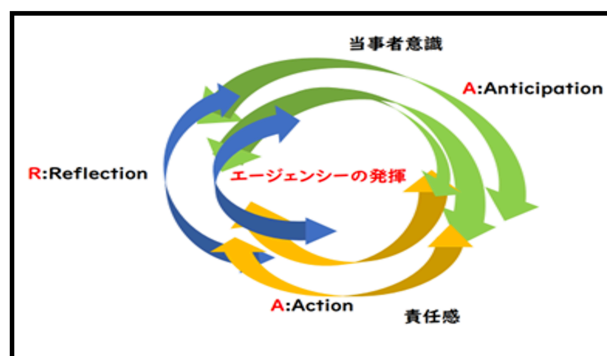


図1 本研究で考える AAR サイクル

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1. 研究の目的

本研究の目的は、特別活動を通じて、児童がエージェンシーを発揮し、自らの意志で AAR サイクルを往還させ、課題を自分事として捉え、責任感を醸成し、次の活動に前向きな態度で取り組める授業を開発することである。また、所属校で授業実践を行い、授業の有効性と課題を明らかにすることである。

## 2.2. 研究の方法

特別活動を通じて、児童がエージェンシーを発揮し、自らの意思でAARサイクルを往還させられる授業を開発する。開発した授業は小学校第6学年を対象に実践を行う。授業中の児童の活動と授業の振り返りを中心に授業の考察を行い、授業内容の有効性と課題について検討する。

## 3. 授業・教材の開発

### 3.1. 授業実践校

本授業は船橋市立高根台第三小学校の特別活動の時間にて実践した。児童の半分は、筆者が昨年度、学級担任として担当した。

### 3.2. 教材の開発

授業のねらいは以下のとおりである。これらの観点から教材を開発した。

【A】 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、話し合い活動を通して児童がエージェンシーを発揮し、自らの意思でAARサイクルを往還させ、役割や責任を果たして集団活動に取り組むものにする。

【B】 1年生と「異年齢交流活動」を行うことで、児童が「自己有用感」を得られるようにする。また、教師主導ではなく児童主体で行う活動を重視する。

【A】は、児童が他者と協働し主体性を発揮しながら、学校生活を自分たちでよくしていこうとする意識や態度を育成したり、学級の話し合いを生かし目標に向けて取り組んだりする活動の中で、エージェンシーを発揮できる場面を設定するものである。学級活動(1)(学級や学校における生活づくりへの参画)で話し合い活動を行い、合意形成したものをもとに、異年齢交流活動を行う。その中で、児童がAARサイクルを往還させ、エージェンシーを発揮するのではないかと考えた。

【B】は、上級生(6年生)が「異年齢交流活動」に主体的に参加し、同級生や下学年(1年生)との関わりを通して、上級生としての自覚や自信がもてるようにした。集団の一員としての自覚をもち、また「交流活動自体が楽しみ」と思えるように、児童のわくわく感を大切にしたいと考えた。「異年齢交流活動」については1.4.で述べたとおりである。

#### 3.2.1. AARサイクルやエージェンシーに関する指導

【A】の観点から教材を開発した。

児童は、AARサイクルやエージェンシーという言葉初めて耳にするため、検証授業を行う前に児童にエー

ジェンシーの定義等の授業を行った。また、AARサイクルを意識したミニ会議を実際に行い、理解を深めた。また、該当学級は、話し合い活動の経験が少ないため、「AARサイクル話し合いプログラム」を(図2)活用し、簡単な話し合いの練習を行った。なお、検証授業のときは、児童自ら話し合い活動ができるように助言を行った。



図2 AARサイクルプログラム

#### 3.2.2. ICTを活用した話し合い活動の開発

意見の共通点や相違点を確認したり分類したり、共通点の視点をもって比べ合ったりするとともに、意見の違いや多様性を生かし、合意形成を図るために、ICT(ロイロノート)を使って考えの交流を行った(図3)。

文部科学省(2020)は、「特別活動の指導におけるICTの活用について」で次のように述べている<sup>15</sup>。

特別活動の特質「集団活動、実践的な活動」の代替としてではなく、特別活動の学習の一層の充実を図るための有用な道具としてICTを位置付け、活用する場面を適切に選択し、教師の丁寧な指導のもとで効果的な活用することが重要。(中略)問題の把握、共有を経て、学習者用端末で個人の意見を表明し合うとともに意見を比べ合い整理する。

ICTを活用することで、発言を行いにくい児童が、意見の表明をしやすくなり、話し合い活動に参画することで児童のエージェンシーが発揮できると考えた。



図3 ICTにおける考えの共有



3.3.3. 異年齢交流活動に向けての開発

【B】の観点から開発した。

児童が「交流活動」を行う際に、「行動の制限」を付けた。行動を起こす際には、児童の能力や環境を考慮することで、児童のわくわくする期待感が生まれ、エージェンシーの発揮が促されるのだと考えた。(図4)

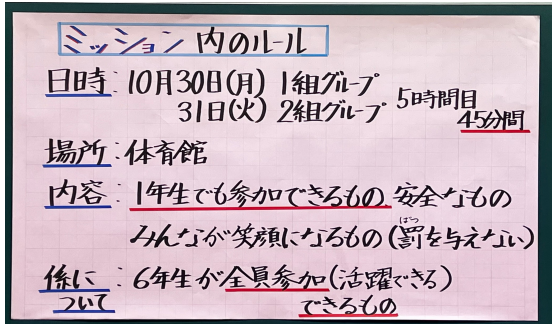


図4 授業者が設定した活動内のルール

また、異年齢交流(1年生との交流活動)をミッションとして位置付け、第1学年の担任に協力してもらい、「ミッション動画」を作成した。動画の中で、「責任感をもって活動すること」「他者意識をもって活動すること」など観点を入れ、児童に意識付けを行った。

4. 授業実践とその考察

4.1. 授業実践の概要

授業の概要は以下の通りである。

実施校 : 千葉県船橋市立高根台第三小学校  
 学年 : 第6学年(2学級)  
 題材名 : 特別活動「1年生と思い出づくりをしよう」  
 実施期間 : 2023年10月~11月  
 授業者 : 後藤律子(執筆者)

表1は単元の流れである。単元全体をAARサイクルで往還できるようにし、1時間ごとにも児童が、AARサイクルが往還できるようにした。これにより、学習者は短期間での学習の進捗を確認し、必要に応じて学習方法を調整することができる。と考える。

表1 単元の流れ

時	AAR	授業の目標	目指す児童の姿
0		AAR サイクルやエージェンシーの意味を理解する	エージェンシー、AAR サイクルの意味を理解している。 【知識・技能】
1	A 見通し	・ミッションについて知る。 ・単元の中で AAR サイクルを使って話合いをすることを知る。 ・めあて(自分たちが目指す姿)について話合い活動を行う。	◎話合い活動の中で、当事者意識の立場で見通し(Anticipation)をもって話合い、ミッションに向けて行動(Action)しようとしている。 【主体的態度】 ◎AAR サイクルの話合い活動の進め方を理解し身に付けている。【知識・技能】
2		・ミッションに向けてどんな活動をすればよいか話合い活動を行う。	◎ミッションに向けての活動は、どれがよいか根拠を明確にしなが発言したり、友達の意見と比べて聞いたりしている。行動(Action) 【思考・判断・表現】
3		・係分担を決める。	◎ミッションのめあてを意識して、友達と協力して取り組んでいる。行動(Action) 振り返り(Reflection) 【主体的態度】
4		・準備を行いながら、めあてに向けて活動できているか振り返りを行う。	◎活動中の振り返りをする中で省察的思考力をもつ。振り返り(Reflection) 【主体的態度】
5	A 行動	・1年生と一緒にミッションで考えた活動を行う。	◎1年生を意識した「責任」をもった行動ができる 行動(Action) 振り返り(Reflection) 【思考・判断・表現】
6	R 振り返り  A2 見通し	・自分の行動を客観的に見てどうだったか、振り返りを行う。 ・振り返りをもとに次回の活動は何がいいか見通しをもつ。	◎自分の活動を客観的(メタ認知)に見て振り返りを行っている。 ◎次回の活動に向けて見通しをもつ。 振り返り(Reflection) 見通し(Anticipation) 【主体的態度】

4.2.1. 1時間目授業の実際と考察

表2は、1時間目の授業の流れである。

1年生との交流活動をするというミッションについて知り、活動に向けて目指すがた(めあて)について話合い活動を行う。

表2 1時間目の流れ

学習活動 予想される児童の反応	指導上の留意点	◎目指す児童の姿【観点】(評価方法)
<ul style="list-style-type: none"> <li>●ミッションについて内容や制限等を知る。</li> <li>●異年齢交流を通して、自分が目指す姿は何か、ロイロノートに記入する。(個人)</li> <li>・1年生や友達との関わり方(人間関係形成)</li> <li>・友達と協力した参加の仕方(社会参画)</li> <li>・計画を実践するためにどうしたらいいか(自己実現)</li> <li>●考えを共有する。</li> <li>●個人のめあてから、学級で共通するめあてを話し合う。</li> <li>●活動の振り返りを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミッションは6年生に期待感をもだということに気付かせる。</li> <li>・ミッションには制限があり、その中で活動することを知らせる。</li> <li>・ロイロノートを使用し一人一人が考えた上で話し合うことができるようにする。</li> <li>・友達の考えを参考にしてもいいことを伝える。</li> </ul>	<p>見通し</p> <p>行動</p> <p>◎AARサイクルを理解し、意識しようとしている。</p> <p>【知識・技能】</p> <p>◎ミッションに向けてどのような姿になりたいか考え、エージェンシーを発揮している。</p> <p>振り返り</p> <p>◎話し合いにより、一人一人の考えを深めたり、広げたりできたか。</p> <p>【思考・判断・表現】</p>

授業の様子から、児童がAARサイクルを意識した話し合い活動を行い、1年生のためにどのような活動すればよいか、当事者意識の立場で考えていたか考察する。

異年齢交流を「ミッション」として位置付け、第1学年の担任に協力をしてもらい、「ミッション動画」を作成した。動画があることで、どのような活動をすればよいか、見通しをもつことができた。また、個々のめあてをロイロノートで作成し、共有した後、話し合い活動を行った。個々のめあてを元に、学級のめあてを作成し、活動の見通しをもたせた。活動が、AARサイクルからずれた場合、「学級の目標」に戻るよう助言した。これにより、児童は常に目標に向かって進み、AARサイクルを往還することができた。

次に、授業後の感想をAIテキストマイニング<sup>16)</sup>にしたところ(図6)、「自分の意見が言えた」という感想が多く見られた。意見を積極的に発言する児童はいたが、「話し合う」を深めるところまでは至らなかった。また、「先生にほめられるためにがんばる」など、他者視点をもてていない回答も見られたが、「1年生に頼られるようにがんばりたい」など、役割や責任を果たそうとする感想も見られた。

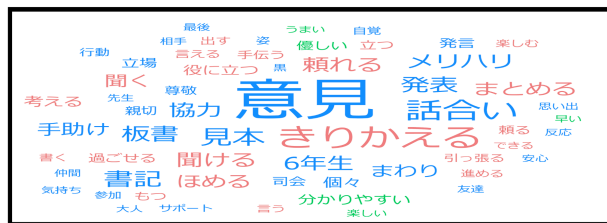


図6 1時間目授業後の感想のテキストマイニング

4.2.2. 2,3時間目授業の実際と考察

表3は2時間目、3時間目の授業の流れである。

ミッションの中の制限で(場所・時間・全員が必ず参加できる係分担・1年生でも参加できるもの等)どんな活動をすればよいか話し合い活動を行なう。

表3 2・3時間目の流れ

学習活動 予想される児童の反応	指導上の留意点	◎目指す児童の姿【観点】(評価方法)
<ul style="list-style-type: none"> <li>●前回のロイロノートを見て自分のめあてを確認する。</li> <li>●話し合いの形に移動する。</li> <li>① 活動の決定(2時間目)</li> <li>② 役割とその分担(3時間目)</li> <li>●決まったことの発表をする。</li> <li>●話し合いの振り返り。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミッションの目的は何か振り返らせる</li> <li>・必要に応じて、自分の意見に固執せず、納得したうえで考えを変えなど、折り合いの付け方について児童から意見ができるように助言する。</li> <li>・全員が必ず係をやることを再度確認させる。</li> <li>・めあてにそった活動か振り返りながら考えさせる。</li> </ul>	<p>見通し</p> <p>◎友達の意見のよさを生かし、交流活動の内容や工夫について考えている。</p> <p>行動</p> <p>◎AARサイクルを意識しながら話し合いを進めている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p>◎話し合い活動で、1年生の立場を考えて(当事者意識)話し合い、ミッションに向けて実践しようとしている。</p> <p>◎話し合いを通してエージェンシーが発揮されている。</p> <p>【主体的態度】</p>

これまでの異年齢交流活動を生かしたり、友達の意見のよさを生かしたりして、ミッションの内容や工夫について考えた。AARサイクルから内容が逸れたときは、指導者が助言に入り、新たな見通しをもたせ、合意形成を行った。児童が話し合いの見通しをもてたことで、当事者意識(1年生)をもった活動ができた。

1組の活動内容は、ペアドロケイ、○×ゲーム。

2組の活動内容は、宝探しに決定した。

1時間では、活動の内容しか決まらなかったため、後日、係分担を決めた。授業者は活動の数の設定もなかったが、児童の意見から「活動が1つだと1年生が飽

きてしまう。」「3 つ以上だとルールが理解できない。」等、他者視点で話し合い活動に参加する児童が見られた。

また、2 時間目以降、児童の振り返りから AAR サイクルを意識した感想が見られるようになった。(図 7・8)

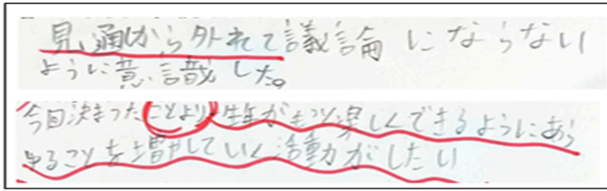


図 7 児童 A の感想

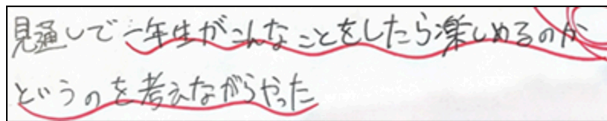


図 8 児童 B の感想

#### 4.2.3. 4 時間目授業の実際と考察

表 4 は、4 時間目の授業の流れである。

ミッションに向けて係ごとに準備を行う。準備を行いながら、めあてに向けて活動できているか振り返りを行う。

表 4 4 時間目の流れ

学習活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿【観点】(評価方法)
授業前準備 ●係ごとに計画を立てて、協力して準備をする。 ●朝の会や帰りの会などで、係ごとに経過報告を行ったり、お知らせを行ったりする。 4 時間目 ●係の準備やリハーサルを行う。 ●活動の振り返り	・準備の進捗状況を確認する。      ・次時の確認を行う	見通し ◎友達と協力して取り組んでいる。  行動・振り返り ◎AAR サイクルを意識しながら活動を進めている。 【主体的態度】 【思考・判断・表現】

帰りの会等で、自主的に準備の進捗状況を確認する児童がいたため活動意欲の継続化を図った。このような事例により児童のエージェンシーが発揮される場面が確認できた。

白井 (2022) は『『行為の中の振り返り』と『行動』という AAR サイクルの 2 つの要素が相互に関係し合っていて、それらを同時に行うことが示唆される<sup>17)</sup>』と述べている。児童の活動中の進捗状況の確認は「行為の中の振り返り」と捉えることができ、この「行為の中の振

り返り」を行うことで、児童が自分自身の行動や結果について深く考え、そこから学びを得るのだと考える。これは、自己認識と自己理解を深めるための有効な手段であると言える。また、「行為の中の振り返り」を行うことで、自分自身の行動や結果についての理解を深め、活動に限界を感じた児童は、新たな見通しをもち活動の工夫を行うことができた。これも児童のエージェンシーと捉えられることができる。

児童 C から「うまくいかなかったことを振り返り次に生かそうとした」という感想が見られた。AAR サイクルを繰り返すことでエージェンシーの発揮を想起させる表現がなされていた。(図 9) また、「具体的にどのような姿を目指していきたいか」や「自分たちで成功させよう」という意識や態度が表現されるようになった。

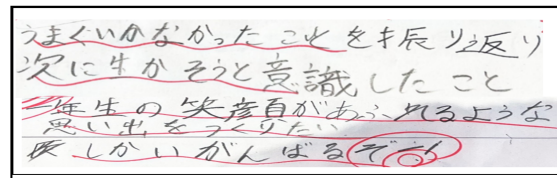


図 9 児童 C の感想

#### 4.2.4. 5 時間目授業の実際と考察

表 5 は、5 時間目の授業の流れである。

1 年生と交流活動を行う。活動後は簡単な振り返りを行う。(表 5)

表 5 5 時間目の流れ

学習活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿【観点】(評価方法)
●「1 年生との思い出づくりの会」を行う。 ●ICT を活用して、アンケートを行う。 【アンケートの内容】 ① 個人のめあては達成できましたか。 ② 学級のめあては達成できましたか。 ③ 今回のミッションに向けて、エージェンシーを発揮して AAR サイクルを回しながら活動しましたか。	・交流会の狙いを確認し、協力して実践できるようにする。	見通し ◎活動の内容を理解している。 【知識・技能】 行動・振り返り ◎AAR サイクルを意識しながら、友達と協力して活動している。 【主体的態度】 【思考・判断・表現】

1 組：ペアドロケイ・〇×クイズ

ペアドロケイでは、1 年生が急にとび出してけがをしないように、1 年生と 6 年生が一緒に逃げる。〇×クイズは「1 年生でも分かりやすいもの」等、1 年生を意識



したルールを作成した。また、危険がないように、スズランテープで枠組みをなどの工夫を行った。

2組：宝探し

宝さがしの地図を1枚1枚手描きで作成し、1年生が分かりやすい工夫を行った。「1年生が嬉しくなる工夫」を考え、一人1個の宝（メダル）が行き渡るように計画した。6年生が1年生の首にメダルをかけてあげ、優しく接する姿が見られた。

児童の感想から、様々な場面で「工夫」という言葉が見られた。工夫することは主体的に取り組む様子として捉えられ、活動に向けてエージェンシーが発揮されたと言える。また、1年生を意識した行動を行ったことにより、「責任のある行動」も育成されたと言える。児童Dの授業後の感想にある「1年生なら」（図10）という言葉からも分かるように、6年生の児童は、他者視点の獲得を身に付けることができたと言える。

【理由】  
 1年生に、深しめたとか、またやりたか、と、言て  
 もらえたから、最後にみんな、え、外おで帰れて、いたが  
 【理由】  
 1年生なら、どう工夫したらかんたんにして、き  
 るか、相手の立場にたて、見通しを持てた。

図10 児童Dの感想

#### 4.2.5. 6時間目授業の実際と考察

表6は、6時間目の授業の流れである。

表6 6時間目の流れ

学習活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿【観点】 (評価方法)
<ul style="list-style-type: none"> <li>●個人のめあてと学級のめあてについて振り返る。</li> <li>●異年齢交流活動直後のアンケートを見て気付いたことを話し合う。</li> <li>●反省をもとに、次回行われる児童会「なかよし集会」に向けて、どのような活動をすればよいか、次回の活動の見通しをもって学級で話し合い活動を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異年齢交流活動で自分の態度を振り返るとともにAARサイクルを意識した活動ができたかの振り返りを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異年齢交流活動の成果と課題を振り返り、次の活動に生かそうとしている。 (観察)</li> <li>【思考・判断・表現】</li> <li>・振り返り</li> <li>◎AARサイクルを意識し考えをまとめようとしている。</li> <li>【知識・技能】</li> <li>・見通し</li> <li>◎次回の活動は何にしようか、見通しをもって話し合いに参加している。</li> <li>【主体的態度】</li> <li>【思考・判断・表現】</li> </ul>

自分が行った活動を客観的に見て振り返りを行う。振り返りをもとに次回はどうの活動をしたらいいか見通しをもつ。ミッションの成果と課題を振り返り、自

他のがんばりに気付いたり、次の活動に生かそうとしたりした。

自分の活動を客観的（メタ認知）に見て振り返りを行った。白井（2020）は、「振り返り」と「見通し」について以下のように述べている<sup>18</sup>。

振り返りによって、自分自身や他者の行動を客観的に評価することによって、将来の行動を自分でコントロールしたり、どういう方向に進むべきかといった感触を得ることができるようになるのである。（中略）自分の経験や価値観など様々な要素を踏まえて、自分自身で望ましいルールや価値観などを様々な要素を踏まえて、自分自身で望ましいルールや価値観を考えることにつながるが、このことは、エージェンシーを発揮していくうえでの基盤になる。

この説明からも分かるように、児童は振り返りを行うことで、「見通し」に向けてエージェンシーが発揮されるもとになった。児童Eの感想（図11）からも分かるように、児童は次回の交流活動は何がいいか、「わくわく感」を意識した活動を考えることができた。

今日は振り返りにいまして考えました。  
 前回の自分とくらべました。  
 (いってほしい) 1年生のために、1年で楽しめる  
 遊びを考えたので、ルールを次回は考える

図11 児童Eの感想

また、単元終了後の児童のテキストマイニングを見ると、図6では「意見」を言うことに重きを置いていた様子だったが、「話し合い」という言葉が中心となったことが分かる。児童が話し合い活動を通して、AARサイクルを往還させた結果である。児童がエージェンシーをもつことで、自分の意見を述べるだけでなく、他者の意見を尊重し、それを自分の考え方に取り入れる大切さを学んだことを意味する。（図12）

図12は、単元終了後の児童の感想のテキストマイニング結果を示している。中心には「話し合い」と「aarサイクル」があり、周囲には「振り返る」「見通しをもつ」「行動を考える」「楽しむ」「手伝える」「工夫する」「話し合う」「手伝える」「見通しをもつ」「見通し」「行動を考える」「振り返る」「楽しむ」「手伝える」「工夫する」「話し合う」「手伝える」「見通しをもつ」「見通し」「行動を考える」「振り返る」「楽しむ」「手伝える」「工夫する」などの言葉が散らばっている。

図12 単元終了後 児童の感想のテキストマイニング

表7 児童の自由記述アンケートのカテゴリー分類結果 (N=65)

【カテゴリー】	『サブカテゴリー』	〈コード例〉
①【自己効力感】	『自主的に行動している』	〈積極的に1年生との交流活動に向けての話し合いに参加した〉〈1年生の交流会に向けて自分の意見を進んで発言した〉〈ミッション(交流会が成功すること)を達成するために自主的に行動した〉
②【協働性】	『友達と協力することに目を向けている』	〈休み時間に集まってリハーサルを行った〉〈グループで協力しながら活動の準備をした〉〈みんなで協力して1年生を笑顔にできた〉
③【他者視点の獲得と創造性】	『1年生の立場にたった行動や考えている』	〈話し合いのときに1年生だったらどのように楽しんでくれるか考えて意見を出した〉〈1年生のことを意識した遊びやルールを工夫して考えた〉〈1年生のために準備をしたり交流活動を行ったりした〉
④【他者視点の獲得と省察的思考力】	『振り返りをもとに行動している』	〈前回の行動を振り返りながら学級の話合いを進めた〉〈振り返りを大切にして次の活動につなげられた〉〈次の交流活動は、さらに1年生のことを考えて活動する〉
⑤【他者視点の獲得と批判的思考力】	『見通しをもって行動している』	〈友達の意見を聞いたり見通しをもったりして発言した〉〈交流会の活動に向けて意見を出し合いながら準備をした〉〈次の交流会に向けてわくわくする遊びを考えた〉
⑥【レジリエンス】	『あきらめず、最後まで行った』	〈対立したこともあったが、最後までやり遂げた〉〈途中あきらめそうになったけど、がんばった〉
⑦【モチベーション】	『なりたい姿を想像している』	〈1年生に頼られる存在になりたい〉〈1年生に「また6年生と遊びたい」と言ってもらいたい〉

### 4.3. 自由記述の考察

児童の自由記述をもとに分析を行った。(表7) 得られたデータについては、佐藤(2008)を参考に以下の手順を踏まえてカテゴリー分けをした。まず得られた自由記述を内容ごとに区切り、それぞれに内容を端的に表すコードを付けていった<sup>19)</sup>。

例えば「交流会で1年生を笑顔にするために、友達と協力して楽しませた」という記述から、この児童は友達と協力し課題解決に向かっていることがうかがえるため〈友達と協力して1年生を笑顔にできた〉というコードを付けた。次に、内容や意味が類似するコードを集め、より抽象的なサブカテゴリーを生成した。前述した例では、『友達と協力することに目を向けている』というサブカテゴリー名を付けた。そして、それをさらに抽象化したものを、カテゴリーとした。本稿で分類したカテゴリー名は、Education2030プロジェクトのコンピテンシーの構築要素であるコンストラクトをもとに考えた。

また、出されたカテゴリー、カテゴリー間の関係の妥当性を確保するため、長期研修生3名でカテゴリー間の関係を確認、検討していった。

カテゴリー化することで、児童が身に付いたコンピテンシーが分かりやすくなった。

まず、①【自己効力感】についてのカテゴリーである。「自主的、積極的、進んで」等、児童が意識して感じたことをまとめたものである。これは、異年齢交流で育まれるとする「人と関わる喜び」を、児童自らが獲得する

ことによって、エージェンシーが発揮されたのだと捉えられる。②【協働性】についてのカテゴリーは「ミッションを成功させたい」という個々のエージェンシーに対し、学級全体で協働する姿である。これは、特別活動で重視する「人間関係形成」にも通ずるものであり、活動をするなかで、お互いが課題解決に向けてエージェンシーを発揮していることが分かる。③【他者視点の獲得と創造性】のカテゴリーについてである。児童の記述を見ると他者を意識することで、工夫を行っていることが分かった。よって、他者視点の獲得と創造性を一つのカテゴリーにまとめた。④【他者視点と省察的思考力】のカテゴリーについては、児童が省察的思考力をもつことで、新たな状況に向き合い、責任ある行動がとれることが分かった。⑤【他者視点と批判的思考力】のカテゴリーについてである。これはAARサイクルの「見通し」にもあたり、活動全体を通して見通している力と言える。この【省察的思考力】と【批判的思考力】は同時に行われていることが多く、児童が自らAARサイクルを回している結果となる。また、話し合い活動の中で意見を傾聴することで、多様な角度から物事考える児童がいた。⑥【レジリエンス】のカテゴリーでは、異なる見方があったとしてもやり遂げることができたことにより、対立やジレンマに対処する力が育まれたと言える。最後に⑦【モチベーション】のカテゴリーである。児童は活動の中で、他者に認められることで、モチベーションが上がり、エージェンシーが発揮されることが分かった。



## 5. 研究のまとめ

### 5.1. 研究の成果

研究成果について記述する。

一点目は、児童が AAR を往還し、エージェンシーを発揮することで他者意識をもち、問題解決をしようとする態度が育成される結果になった。

二点目は、検証授業の後に、学級担任も「AAR サイクルを話し合い活動に取り入れてみよう」と考え挑戦したという報告を得た。学級担任もエージェンシーを発揮し、学級の課題に取り組もうとしている成果が見られた。

### 5.2. 残された課題

残された課題について記述する。

本研究は、1 か月という限られた期間の中で検証されたものである。したがって、児童全員が AAR サイクルを活用できたとは言えない。今後は、児童が自ら課題を設定し AAR サイクルを往還できるような授業開発をしていくことが課題となる。

<sup>1</sup> 本論文は筆者の「令和 5 年度千葉県長期研修 研究・研修報告書」の内容を再構成し、加筆・修正を行ったものである。

<sup>2</sup> 日本財団 (2022)、pp.8-11

<sup>3</sup> 文部科学省 (2018)、p.4

<sup>4</sup> OECD (2020) 『2030 年に向けた生徒エージェンシー』  
[https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD\\_STUDENT\\_AGENCY\\_FOR\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf)  
(最終閲覧日 2024 年 2 月 28 日)

<sup>5</sup> 文部科学省 (2018)、p.4

<sup>6</sup> 小牧瞳 (2023) 『エージェンシーを発揮させる授業デザインに関する研究』、人文公共学研究論集 第 46 号、p.9

<sup>7</sup> OECD Learning Compass 2030 仮訳

<sup>8</sup> 松尾ら (2020)、p.120

<sup>9</sup> 元ら (2021)、Vol20-1 pp.2~3

<sup>10</sup> 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 特別活動編』、日本文教出版、p.11

<sup>11</sup> 文部科学省 (2017)、p.45

<sup>12</sup> 林ら (2020)、p.18

<sup>13</sup> 白井 (2020)、p.168

<sup>14</sup> 国立教育政策研究所 (2011)、p.12

<sup>15</sup> 文部科学省 (2020) 『特別活動の指導における ICT の活用について』

[https://www.mext.go.jp/content/20201028-mxt\\_jogai01-000010146\\_013.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201028-mxt_jogai01-000010146_013.pdf) (最終閲覧日 2024 年 1 月 25 日)

<sup>16</sup> User Local AI テキストマイニング

<sup>17</sup> 白井 (2020)、p.173

<sup>18</sup> 白井 (2020)、p.173

<sup>19</sup> 佐藤 (2008)、pp.33-73

### 引用文献

元笑予・下島泰子・林尚示 (2021) 「OECD のエージェンシー理論と小学校児童への質問紙調査の事前事後比較を通じた学級活動でのエージェンシーの育成の検討」『関係性の教育学』、The Journal of Engaged Pedagogy Vol.20-1、pp.2-3

国立教育政策研究所 (2011) 「子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』活動実施の考え方から教師用活動案まで」  
[https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2306sien/2306sien3\\_2s.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2306sien/2306sien3_2s.pdf) (2024 年 2 月 22 日最終確認)

小牧瞳 (2023) 「エージェンシーを発揮させる授業デザインに関する研究」、『人文公共学研究論集』、第 46 号

佐藤郁哉 (2018) 『質的データ分析法』、新曜社

白井俊 (2020) 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 - エージェンシー、資質・能力とカリキュラム -』、ミネルヴァ書房

日本財団 (2022) 18 歳意識調査 「第 46 回 - 国や社会に対する意識 (6 カ国調査) -」 報告書

[https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new\\_pr\\_20220323\\_03.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new_pr_20220323_03.pdf)

(最終閲覧日 2024 年 1 月 22 日)

林尚示・安井一郎・鈴木樹・眞壁玲子 (2020) 「The OECD Learning Compass 2030 と学級活動との対応に着目した特別活動で OECD 準拠型コンピテンシーを育成するための指導方法」、『教育実践学研究』、23 巻、pp.17 - 26

松尾直博・翁川千里・押尾恵吾・柄本健太郎・永田繁雄・林尚示・元笑予・布施梓 (2020) 「日本の学校教育におけるエージェンシー概念について：道徳教育・特別活動を中心に」、『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』、71、pp.111 - 125

文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 特別活動編」、日本文教出版

文部科学省 (2018) 「OECD Education 2030 プロジェクトについて」

[https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf)

(最終閲覧日 2024 年 2 月 28 日)

文部科学省 (2020) 「特別活動の指導における ICT の活用について」

[https://www.mext.go.jp/content/20201028-mxt\\_jogai01-000010146\\_013.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201028-mxt_jogai01-000010146_013.pdf)

(最終閲覧日 2024 年 2 月 22 日)

### 謝辞

研究に関してご指導いただきました千葉大学教育学部藤川大祐先生をはじめ、検証授業でご協力いただいた所属校の職員と児童の皆様、関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。